

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00678

研究課題名(和文) 逐語訳つき日本語作文コーパスによる意図と産出の対応を意識した日中韓の対照分析

研究課題名(英文) Contrastive analysis of Japanese, Chinese, and Korean consciousness of the correspondence between intention and output: A study of a Japanese composition corpus with verbatim translation

研究代表者

金井 勇人 (KANAI, Hayato)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：70516319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：1) 中韓語の「逐語訳つき日本語作文コーパス」の作成(WEBで公開)。日本語作文は1000字、執筆者はN1合格レベルの中韓母語話者(各60名)。テーマは説明文(好きな母国の諺)、描写文(尊敬する恩師とのエピソード)、物語文(4つの絵を見て自由にストーリーを作成)の3つで各40本、計120本。各日本語作文には同一執筆者による逐語訳作文が付いている。2) 作文コーパスを利用した、日中韓の書き言葉の対照研究。コーパス作成で得られた知見をもとに、本科研メンバー(金井・新城・蔡)の連名で2本の論文を執筆・発表。1本は二人称指示の日中韓対照について(埼玉大紀要)、もう1本は比喩の日中韓対照について(琉大紀要)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「意図と産出の対応を意識した対照分析」にあたっては、当該言語の文章とその逐語訳が不可欠であるが、現状では日本語作文とともに同一執筆者による逐語訳を収録したコーパスは見当たらないため、小説やニュース等の原文と翻訳文が対訳データとして用いられている。しかしこれらの翻訳には「意識」の問題がある。また原著者と翻訳者は同一人物ではないので、原著者の表現を翻訳者が形態素レベルで正確に反映している、という保証はない。これに対して本研究では、原文も逐語訳も同一執筆者であるので、上述の問題を排除して分析することが可能となる。このような点に本研究の学術的独自性と創造性があり、ひいては学術的・社会的意義が存在する。

研究成果の概要(英文)：1) Creation of the “Japanese Composition Corpus with Verbatim Translation” of Chinese and Korean (published on the WEB). Each composition in the corpus contains 1,000 characters and the authors are native speakers of Chinese and Korean (60 each) with N1 level Japanese language skills. There are three themes in the corpus: Explanatory Text (about a favorite proverb of your home country), Descriptive Text (about an episode with a respected teacher), and Story Text (creating a story by looking at four pictures). Each Japanese composition contains a verbatim translation to Chinese or Korean by the same author. 2) A contrastive analysis of Japanese, Chinese, and Korean written language using the composition corpus. Based on the knowledge gained from creating the corpus, we jointly wrote and published two papers: One is about the Second-Person Demonstrative (Bulletin of Saitama University) and the other is about Metaphoric Expressions (Bulletin of University of the Ryukyus).

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語作文 逐語訳つき作文コーパス 意図と産出の対応 日中韓の対照分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 例えば、任意の文脈において、中国語母語話者が(a)の日本語作文を書いたとする。

(a) 太郎を知っていますか。あの人は頭が良いですよ。

下線部の「あの」は、近称の「这」、遠称の「那」のいずれかを意図して書いたのか、日本語作文だけからは測り知ることができない(前者なら「太郎」と親しい感じを、後者なら「太郎」と疎遠な感じを表す、あるいは記憶内を指す)。これを調べるには日本語作文とともに、同一執筆者による逐語訳が必要となる。このように、日本語作文を見ていて「もし母語だったらどのように書いたのだろうか」と疑問に思ったことが、本研究の着想に至った経緯である。

(2) 例えば、中国語・韓国語母語話者が日本語作文を書くとき、母語である中国語・韓国語で書くときと比べて、(形態素のレベルにおいて)どのような箇所に対応し、どのような箇所に対応しないのだろうか。それを調べるには、日本語作文とともに、同一執筆者による中国語・韓国語の逐語訳が必要となる。この両者を精緻に対照することにより、同一の執筆者が異なる言語において、同一の意味を有する文をどのように書き分けているのか等を分析することが可能となるだろう。下記は、韓国語母語話者による日本語作文の一部である。

(b) 리포트 ϕ 자료 ϕ 준비 가 다 되었 ϕ 다 고 생각하고
レポート の 資料 の 準備 は もう でき て い た と 思っ て、

この日本語文と韓国語の逐語訳をよく見てみると、いくつかの非対応の箇所を指摘できる。

まず、日本語では「レポートの資料の準備」と書いているのに対して、韓国語訳ではこの2カ所の「の」に対応する形態素(의)がない。次に、日本語では「できていた」のように「てい」を入れているのに対して、韓国語では相当する形態素(있다)を入れていない。さらに、日本語の「準備は」における「は」が、韓国語では「가」となっている。韓国語の格助詞「가」は、日本語のとりたて助詞「は」ではなく、格助詞「が」に相当する。したがって、この両者は形態素のレベルでは対応していない(とりたて助詞「は」に対応するのは「는」である)。

そこで本研究では、同一執筆者による「逐語訳つき日本語作文コーパス」を作成・利用することによって、様々な文法項目について「意図と産出の対応を意識した対照分析」を行う。

(3) 上記のような対照研究を行うにあたっては、日本語文と逐語訳が揃っている資料が不可欠であるが、現状では、日本語作文とともに同一執筆者による逐語訳作文を収録している作文コーパスは見当たらないため、小説やニュースなどの原文と翻訳文が対訳データとして用いられている。

しかし、これらの翻訳には「意識」の問題がある。例えば「目が高い」を韓国語に直訳すると「눈이 높다」となるが、これは「理想が高い」という意味なので、日本語の意味に合わせて「보이는 눈이 있어 (見る目がある)」と意識することになる。

また、原著者と翻訳者は同一人物ではないので、原著者の表現を翻訳者が形態素レベルで正確に対応させている、という保証はない。例えば(b)において、「てい」に相当する韓国語の形態素「있다」を入れなかった原因は、(入れたいが入れにくい)母語干渉であるのか、それとも単に「翻訳者の文体の傾向」であるのか、特定できないのである。

このように現状において利用されている対訳データは、必ずしも精緻な対照分析に適するとは言えない。これに対して本研究では、原文も逐語訳も同一執筆者によって書かれた日本語作文コーパスを作成・利用することで、(b)のような対応/非対応の事例について、「意識」や「翻訳者の文体の傾向」という要因を排除して分析することが可能となる。このように、同一執筆者による、異なる言語における「書き分け」に着目し、形態素レベルにおける「意図と産出の対応を意識した対照分析」を行う点に、本研究の学術的独自性と創造性がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第1の目的は、中国語・韓国語の「逐語訳つき日本語作文コーパス」を作成すること(WEB上で公開)である。その逐語訳は日本語作文の執筆者本人によるものとする。この作文コーパスによって、執筆者が本当に書きたかった表現が、実際には「どのような日本語で書かれたのか」という観点からの対照分析が可能となる(このような分析を本研究では「意図と産出の対応を意識した対照分析」と呼ぶ)。

(2) 第2の目的は、この作文コーパス(のデータ)を利用して、日中韓の書き言葉の対照研究を行い、指示詞・比喻指標・待遇表現・連体修飾などの文法項目における日中韓の形態素の対応/非対応を、「意図と産出の対応」という観点から明らかにすることである。このような対照研究

は、原文と訳文の執筆者が同一ではない資料では不可能であるため、両者が同一である「逐語訳つき日本語作文コーパス」の作成が要請される。

(3) 日本国内で日本語を学習している中国語母語話者・韓国語母語話者（各 60 名）に、日本語作文（1,000 字）と、その中国語訳文・韓国語訳文（逐語訳）を執筆してもらう。ただし執筆者の日本語レベルは、日本語能力試験 N1 以上とする。執筆してもらう作文のジャンルは、その分析の目的に応じて、以下の 3 つとする。

①説明文：あなたの好きな母国の“ことわざ”について説明してください。⇒基本的な文法項目がバランスよく出現することが期待されるため、主に文法項目の分析資料として適する。

②描写文：あなたの尊敬する恩師（学校の先生など）とのエピソードを描写してください。⇒尊敬語や謙譲語をはじめ、さまざまな敬語が抽出できることが期待されるため、主に待遇表現項目の分析資料として適する。

③物語文：4 つの絵（執筆者には別途提示）を見て、自由にストーリー（物語）を作ってください。ただし（それぞれの絵に付した）数字の順番は変えても構いません。⇒比喩表現、および文学的表現なども抽出できることが期待されるため、主に表現項目の分析資料として適する。

以上を整理して、収集する作文の内訳を以下に示す（合計 240 本）。

表 1 日本語作文と逐語訳作文の内訳

	中国語母語話者		韓国語母語話者		計
	日本語作文	逐語訳作文	日本語作文	逐語訳作文	
説明文	20	20	20	20	80
描写文	20	20	20	20	80
物語文	20	20	20	20	80
計	60	60	60	60	240

3. 研究の方法

(1) 1 年目の主な作業：中韓母語話者（各 60 名）に、日本語作文（1,000 字）およびその中国語訳文・韓国語訳文（逐語訳）を執筆してもらった。合計で日本語作文 120 本、その訳文 120 本。執筆者は日本の大学・大学院に在籍している者で、日本語能力試験 N1 合格以上とした。

執筆を依頼するにあたり、「作文収集システム（執筆用 WEB サイト）」を構築し、これを利用して自宅等で作文を執筆してもらった。このサイトは以下のような仕様である。

①日本語および中国語・韓国語が滞りなく入力できる。

②コピー&ペーストや予測変換などができない。

③完成した作文は WEB 上にアップできる（ただし USB でバックアップをとる）。

(2) 2 年目の主な作業：上記の作文 240 本について、別途、中韓母語話者（各 1 名）に依頼して、全文を形態素／語の単位に分割し、仮の逐語訳を付してもらった。その成果に蔡氏（研究協力者）が目を通して、検討の余地がある箇所をすべて洗い出した。

以上を受けて、120 本の日本語作文と 120 本の中韓語訳文を、相互に参照しながら、1 本ずつ検討を重ねていった。その際には、上記で指摘された検討の余地がある箇所は言うまでもなく、それ以外の箇所についても、すべて 1 つ 1 つ丁寧に検討していった。その過程において、より適切な逐語訳に修正したり、訳語を統一したり、といった作業を重ねた。また 1~2 週間に 1 回程度のオンライン会議を開催して、本科研メンバーそれぞれが疑問に感じた箇所について全員で議論し、方向性を決めていった。

(3) 3 年目の主な作業：以上の作業によって完成したデータをもとに「中韓母語話者による逐語訳つき日本語作文コーパス」を作成し、WEB 上に公開した。この作業は新城氏（研究分担者）が中心となって行った。メンバーで話し合ったことをまとめて専門業者に作成を依頼し、その試作版を PC モニター上で確認・試行した後、さらなる要望を専門業者に伝えて修正してもらう、といった作業を繰り返していき、作文コーパスの完成・公開に至った。

図 1 作業のタイムテーブル

	平成 30 年度	平成 30 (令和 1) 年度	令和 2 年度	
作文の収集	→			
データの処理		→		
コーパス作成			→	
作文の対照分析			→	

4. 研究成果

上述した作文コーパスの作成に加えて、その過程で得た知見をもとに、複数の論文を執筆・発表した。主なものは、科研メンバー（金井・新城・蔡）の連名による以下 2 本である。①二人称指示の日中韓対照について（埼玉大学紀要）、②比喩の日中韓対照について（琉球大学紀要）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河正一・金井勇人	4. 巻 8
2. 論文標題 記憶指示のku・ceについての一考察 - 点的記憶指示・線的記憶指示という観点から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝鮮語研究	6. 最初と最後の頁 37-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 新城直樹	4. 巻 4
2. 論文標題 文字列類似度と意味類似度から見た漢字読み問題選択肢のパターン分類	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 琉球大学国際教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金井勇人・河正一・金聖実	4. 巻 13
2. 論文標題 『坊ちゃん』における指示詞「その」「あの」の表現効果 - 中国語版・韓国語版と対照して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 埼玉大学日本語教育センター	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金井勇人・蔡梅花・新城直樹	4. 巻 15
2. 論文標題 二人称指示における日中韓の対照分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 埼玉大学日本語教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新城直樹・蔡梅花・金井勇人	4. 巻 5
2. 論文標題 中韓母語話者の日本語作文における比喩表現について - 指標比喩・結合比喩・文脈比喩という観点から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 琉球大学国際教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 16-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 金井勇人
2. 発表標題 日本語の指示詞は何をどう指しているか - 韓国語・中国語と対照しながら -
3. 学会等名 埼玉大学リベラル・アーツ研究セミナー (2019.01.25, 埼玉大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新城直樹・布施悠子
2. 発表標題 Adobe Airアプリケーションを併用した著作権教育の提案
3. 学会等名 日本教育工学会 第34回 全国大会 (2018.09.28, 東北大学)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金井勇人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 経団連事業サービス 社内広報センター	5. 総ページ数 1
3. 書名 伝わる文章の裏ワザ：第16回 指示詞について考える～「この」「あの」の使いどころ～」Communication Seed (120) pp.12	

〔産業財産権〕

〔その他〕

【1】中韓母語話者による逐語訳つき日本語作文コーパス saitamagengoken.sakura.ne.jp/chikugo-corpus/
【2】指示詞「これ」「それ」「あれ」は、どんなふうに使われていますか(国立国語研究所 > ことば研究館 > ことばの疑問) https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-62/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新城 直樹 (ARASHIRO Naoki) (90367128)	琉球大学・グローバル教育支援機構・講師 (18001)	
研究分担者	河 正一 (HA Jeongil) (20812150)	大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授 (24403)	削除：2020年3月9日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------